

97 年度 ACE 北海道支部総会 および 12 月研究会開催！

事務局 青柳

1997 年度の ACE 北海道支部総会および 12 月研究会が、12 月 13 ~ 14 日、札幌市の北海道青少年会館（真駒内ハイツ）にて開催されました。

支部も今年で 4 年目、すなわち支部総会も 4 回目ですが、今回初めて札幌市内を会場に選びました。理由は簡単、「近いから」。おかげで仕事の関係で宿泊できない、あるいは 2 日目だけ出られるという会員も来ていただき、16 名の参加を得ました。

札幌近郊以外に在住の方には申し訳ないのですが、毎年雪深くなるこの時期に総会を開くこと、またなるべく多くの会員に出席していただきたいことを考え合わせると、次年度以降も総会は札幌近郊での開催を原則したいと思います。できる限り早い時期に議案をメーリングリストや ACE ネット、あるいはニュースレターや支部ホームページにアップするようにしますので、参加できない皆さんからも議事をお寄せいただければと思います。

総会議案は後に掲載しますが、1997 年度事業報告および会計報告、1998 年度事業計画および予算計画について承認されました。このうち 1998 年度事業計画の活動内容については、現時点で開催がはっきりしている、あるいは可能性が高いものを盛り込んであります。基本的には月 1 回の研究会開催をベースとして、各種イベントにも積極的に関わっていく、という方針です。皆さんのご参加を期待しております。



見付さんは ACE 研究会は初めてかな？

また、同時に開催した研究会では、「新しいメディアを活用した開かれた学びの場の構築」をテーマに、先日行われた北野台中での発明工夫研究大会をきっかけとして、今はそれぞれ別個に活動している教育関係者の人的ネットワークを作り、技術的・教育的諸問題を解決するにはどうしたらいいのか、についてじっくり話し合いました。議論は 2 日間で 6 時間にも及び、ここで話したことをもとに 1 月に札幌市ネットワークプラザで予定している教員向け研修会（別項参照）に始まる具体的アクションプランへ結びつけていこう、という方針をまとめました。この議事録も合わせ

て掲載します。



半澤先生、サッカー帰り。

1997 年度 教育とコンピュータ利用研究会北海道支部総会 議案

■（第一号議案）1997 年度事業報告

- 教育研究会を開催しました。
- 各種団体に協力しました。
- ニュースレターを毎月発行しました。（Vol.4.1 ~ 12）
- バーチャル雪まつりを実施しました。
- NCF97 に協力しました。
- INTER CITY OROPPAS 運営に協力しました。
- POEM97 に参加しました。

□新年会を開催（1997 年 1 月、吉村事務局長宅）

□北海道高校文化連盟・北海道高校新聞教育研究会・北海道新聞主催第 7 回高校新聞制作技術講習会主催「コンピュータによる新聞制作」で技術講師として協力（1997 年 1 月 10 日、北星学園女子短期大学）

□バーチャル雪まつりを主催（1997 年 2 月 5 日 ~ 11 日、さっぽろ雪まつり）

□小樽市教育委員会・小樽市民大学講座実行委員会主催第 2 4 回小樽市民大学講座で「インターネットで広がる社会と暮らし」と題して講演協力（1997 年 2 月 19 日、小樽市日専連ビル 7 階大ホール）

□ACE 総会に参加（1997 年 2 月 21 日、幕張メッセ）

□釧路マルチメディア協会主催「ネットワークコミュニティフォーラム in 釧路」でホームページコンテスト審査委員長として協力（1997 年 3 月 1 日、釧路生涯学習センター）

□札幌市など主催「サイバースペース Sapporo'97」において「マルチメディアバトル」を開催（1997 年 3 月 11 日、札幌パークホテル）

□キヤノン販売株式会社主催キヤノンデジタルフェア講演会で「教育におけるインターネット活用と道内の取り組みについて」と題して講演協力（1997 年 3 月 18 日、札幌グランドホテル）

□小樽電信電話ユーザー協会主催文化講演会で「インターネットで広がる生活と教育 ~ ネットワークで地域振興 ~」と題して講演

協力（1997年3月25日、小樽市民センタ・マリホール）

□北海道電気通信監理局主催マルチメディア技術講習会で「教育とインターネット」と題して講演協力（1997年4月18日、北海道電気通信監理局第一会議室）

□ネットワークコミュニティフォーラム'97主催「NASA 未来の教室」と題して講演協力（1997年4月26日、札幌市ネットワークプラザ）

□4月研究会「モバイルマルチメディアの現状と教育への利用の可能性」を実施（1997年4月27日、NTT北海道移動通信網本社ビル）

□北海道テレコム懇談会・情報通信月間推進協議会主催「テレコム情報化富良野セミナー'97」で「インターネットと教育」と題して講演協力（1997年6月20日、（社）富良野地域人材開発センター）

□ネットワークコミュニティフォーラム'97主催NCF教育フォーラム「明日の教育ネットワークを考える in 札幌」（テレビ会議システムを使って米国NASA未来の教室プロジェクト（COTF）に訪問中の道都短大・野口助教らと意見交換）に協力（1997年6月18日、株式会社インターネットイニシアティブ札幌支店）

□千歳マルチメディアと教育研究会と共催で「インターネット入門講座」で「インターネットとは」と題して講演・研究会実施（1997年6月28日、千歳市マルチメディアセンター）

□ネットワークコミュニティフォーラム'97と共催「モバイルマルチメディアキャンプ'97」開催（1997年7月12日～13日、支笏湖ポロピナイキャンプ場周辺）

□教育技術法則化北海道地方合宿のコンピュータ活用講座「モバイルコンピューティングを教育に活かす」に協力（1997年7月26日、長沼町町営温泉）

□POEM'97に参加、発表（1997年8月2日～3日、大阪市アジア太平洋トレードセンター）

□北海道こねっとプラン推進協議会主催「先生のためのマルチメディア活用研修会」で「インターネットサーバの構築について」と題して講演協力（1997年8月5日、札幌市ネットワークプラザ）

□全国高等学校新聞教育研究会・日本新聞協会共催「全国学校新聞指導者研修会」にて技術指導と協力（1997年8月4日～6日、北海道新聞社）

□札幌音楽専門学校主催「コンピュータミュージック1日体験講座」に協力（1997年8月17日、札幌音楽専門学校）

□北海道社会教育総合センター主催「視聴覚教育指導者研修講座」で「ホームページ作成講座～応用編～」と題して講演・実技講師協力（1997年8月27日～28日、北星学園女子短期大学）

□根室マルチメディア協議会主催「スマートリバープロジェクト根室会議」でパネルディスカッション「マルチメディアが変えるライフ・スタイル～ネットワーク社会におけるコミュニティの役割とその機能を考える～」でパネラーとして協力（1997年9月20日～21日、日専連ビル）

□ネットワークコミュニティフォーラム'97主催「NCFフォーラム イン 苫小牧」で「ネットワークコミュニティフォーラムとは」と題して講演協力（1997年10月3日～4日、苫小牧ホテルニュー王子）

□北海道高等学校新聞教育研究会主催「北海道高等学校新聞教育研究大会」で「デジタル学校新聞のこれから」と題して講演協力（1997年10月8日～9日、北海道札幌星園高等学校）

□上士幌町の平成8年度「文教施設のインテリジェント化に関するパイロットモデル研究報告」研究に協力（1997年10月11日、北海道新聞社）

□教育とコンピュータ利用研究会主催教育研究会「地域社会と情報教育」を実施（1997年10月25日、様似町立図書館）

□札幌教東地区事業「インターネットの活用法」にて講演・技術指導（1997年10月28日、札幌市ネットワークプラザ）

□北海道発明工夫教育連盟主催「第18回北海道発明工夫教育連盟研究大会」研究授業、シンポジウムに協力（1997年11月21日、札幌市立北野台中学校）

□ネットワークコミュニティフォーラム'97主催NCF教育フォーラム「明日の教育ネットワークを考える in 札幌」（テレビ会議システムを使って米国NASA未来の教室プロジェクト（COTF）と意見交換）にシンポジウムコーディネートで協力（1997年11月22日、札幌市ネットワークプラザ）

□NTTマルチメディアネットワーク研究所主催「第2回公開サロン、オープンラボ」のパネルディスカッションでパネラーとして協力（テレビ会議システムにより札幌、東京、神戸、飯塚を結んで開催）（1997年11月26日、札幌市ネットワークプラザ）

□12月研究会「新しいメディアを活用した開かれた学びの場の構築」を開催（1997年12月13日、北海道青少年会館）

■（第二号議案）1997年度会計報告

（収入の部）

項 目	金 額
本部補助	281,800
月額	130,000
全国総会、POEM 交通費	151,800
バーチャル雪まつり協力費	400,000
公式行事協賛金（雪まつり実行委）	300,000
HP制作協力費（道新メディック）	100,000
MMM キャンプ協賛金（NTT ドコモ）	100,000
外部研究会協力謝金	81,373
CD-ROM N43 売上げ	9,500
前年繰越金	355,500
合 計	1,228,173

（支出の部）

項 目	金 額
バーチャル雪まつり運営費	355,053
サーバー運営費（経営情報センター）	206,463
プロバイダー契約費（ネットファーム）	82,812
備品購入費	21,113
会議費	44,665
MMM キャンプ運営費	155,868
研究会・支部総会運営費	176,552
96年度支部総会	96,061
研究会	80,491
機器購入費	200,288
貸出機（MLS200）	58,170
モバイルデータカード（5セット）	73,480
モデムカード	39,480
イーサカード	20,790
QV-10用ケーブル	8,368
全国総会、POEM 交通費補助	201,600
オーロラネット年会費	25,937
貸出機送料	19,059
書籍・支部印購入費	6,475
次期繰越金	87,341
合 計	1,228,173

■（第三号議案）1998年度事業計画

(方針)

教育におけるマルチメディアとインターネット(新しい社会情報環境教育システム)環境の整備を推進する。

教育現場でのマルチメディアとインターネットの具体的活用方法等について研究実践する。

ACE 北海道支部のホームページの作成運営を行う。

ニュースレターを毎月発行する。(Vol.5.1 ~ 12)

ACE 北海道のメーリングリストの運営を行う。

バーチャル雪まつりプロジェクトを実施する。

教育実践に関する事例集「北海道の教育と情報(仮題)」をまとめ、過去の実績と今後の展望を具体化することを目指す。

教育委員会、NCF、北海道マルチメディア協会、こねっとプランなどの団体の活動と連携し、上記の目的達成を目指す。

- 1月: 新年研究会、新聞制作技術講習会(1/9)、あたらしいメディアの教育活用研修会(1/13,14)
- 2月: デジタルウィーク Sapporo、バーチャル雪まつり、ACE 総会(幕張)
- 3月: 教育研究会(札幌大学)、マルチメディアコンテンツ講習会
- 4月:
- 5月: 教育研究会(岩見沢)
- 6月: 札幌市事業に協力
- 7月: マルチメディアキャンプ、教育研究会
- 8月: 教育とコンピュータ利用研究会全国大会 POEM'98(阿蘇)
- 9月: 教育研究会
- 10月: 全道技術家庭科教育研究大会
- 11月: 教育研究会
- 12月: 教育研究会、北海道支部総会

■ 1998 年度予算計画

(収入の部)

項 目	金 額
本部補助	270,000
月額	120,000
全国総会、POEM 交通費	150,000
バーチャル雪まつり協力費	550,000
公式行事協賛金(雪まつり実行委)	300,000
ホームページ制作費(道新メディック)	250,000
デジタルウィークサッポロ協力費	225,000
前年繰越金	87,341
合 計	1,132,341

この他に ACE 事務局運営費として、道新で 50 万円を予算化
(支出の部)

項 目	金 額
バーチャル雪まつり運営費	550,000
サーバー運営費(経営情報センター)	200,000
ホームページ制作費	250,000
備品購入費・会議費	100,000
サディジタルウィークサッポロ運営費	225,000
研究会・支部総会運営費	110,000
97 年度支部総会	30,000
研究会	80,000
全国総会、POEM 交通費補助	200,000
オーロラネット年会費	25,000
雑費・予備費	22,341
合 計	1,132,341

■ 1998 年度北海道支部幹事

支部長: 武田 亘明(北星学園女子短期大学)

副支部長(支部幹事): 荒島 晋(札幌市立発寒中学校)

事務局長: 青柳 貴文(北海道新聞社情報開発本部)

編集長(会計担当): 吉田 哲也(北海道新聞社情報開発本部)

幹事・VSF プロジェクト: 水越 洋(アトリエアイリス)

幹事・COTF プロジェクト: 野口光孝(道都大学短期大学部)

幹事・ゼンマイハグルマプロジェクト: 尾崎 廉(札幌市立北野台中学校)

幹事・デジタル学校新聞プロジェクト: 高瀬 敏樹(北海道札幌星園高等学校)

幹事: 佐藤 真史(札幌市立福井野中学校)

幹事: 村田 城司(標茶町立阿歴内中学校)

幹事: 半澤 雅宏(千歳市立祝梅小学校)

監査: 伊藤 明彦(サテライト)

研究会議事録

テーマ

「新しいメディアを活用した開かれた学びの場の構築」

(北野台の研究会をきっかけに)

(13日)

北野台のほかの先生方はどのような感想をもっているのか?

【尾崎】(札幌北野台中)

評価する声もあるが、いままでのやりかたに慣れている先生はありやなんだ、という声もある。先生が生徒に教えるんだ、という概念から抜け出ていない。

【武田】(北星学園女子短大)

そこは変わらず、どのように教えるか、という環境がどっと広がるということではないのか?

【大橋】(札幌平岡小)

僕はメディア教育推進派です。いままでも消防指導員などが学校に来ている例はある。ただし、指導者、支援者として外部の人が入ってきたのはこのまへの研究会が初めてではないかと思う。

【武田】コンピュータ以外の授業では外部の支援者の入る例は?

【大橋】製菓所の見学など、例はある。生徒はそれを求めているように思う。

【武田】来るだけでなく、生徒が行くこと、双方向で交流することが重要と思う。

【高瀬】(札幌星園高)

日常的にこの間のような形で行うのは難しいと思う。時間が許すときだけ、というやりかたもあるが、そうすると授業ということからは離れると思う。

【武田】アメリカでは地域への貢献がボランティアとしてポイントになったりする。先生以外が学校に入ることに意味はあるか?

【高瀬】詰まったときに、ちょっとした手助けで道が開けることもある。サポーターはたくさんいたほうがいい。効率から考えると、今は難しいが、望ましい方向であることは確かだ。

【武田】何十人もサポーターがいる状態は現実的ではない。ただ、授業内容によって望ましい形があるはずだ。

【見付】(NTT)

支援者になれそうな大人は、2割くらいだと思う。その人たちがいつも学校に行ける可能性は現実には低いと思う。

【武田】要所要所で、ということになるのかな。

【見付】ネットワークを有効に活用するなどを考える必要があると思う。

【武田】それ自体に意義はあると思うか。

【水越】100%意義があるか、ということにはまだまだねっていき必要があるのではないかな。

【荒島】(札幌発寒中)

(富山大のサイトを見せて)

ケースごとでは地域の学習に対する効果、というはあると思う。人材バンクなどの仕組みが必要だろう。その際、登録者の質、学校教育への理解というのは大きな意味を持つ。

【尾崎】教員はプライドで自分たちの教育に対する使命感があるが、実は外部のエキスパートが教えた方がいい。教員の意識改革が必要。2年後に学校のネットワークシステムができるときに、その中に入れてしまうことを考えたい。

【大橋】イギリスでは、情報教育専門集団を学校に派遣するシステムがある。

【見付】生涯教育に人材バンクがあるが、それを学校にも持ち込めないのか？

【荒島】社会教育には持ち込まれているのだが、学校教育には来ていない。

【大橋】相模原市には、企業と教委が協力するシステムがある。

【飯豊】(経営情報センター)

システムは個々の学校や企業ではできない。ボランティアをするにしても、どこに行ってもすればよいのか。バンクができるのなら、



武田先生黒板使わせるとちょっとうるさいぞ。

双方が必要情報を掲載できるボードが必要。ボランティアについては、それだけでは賄えない場合に実費分を保障するような制度が必要。

【大橋】札幌にも実際に動いているシステムがある。野外活動のときに学生を呼ぶシステムがある。それを情報教育にも活用できないかな。

【尾崎】それに加えて、大人の支援者も組み合わせさっていくといいと思う。

【村田】(標茶中)

各学校の機械のメンテをして歩くような場合は、当然実費の補助が必要。町教委でも人材バンクの話は何度も出ているが、そのたびに面倒だという理由で消えてしまう。

【武田】新しいメディアを入れるにあたっては、苦労が増えるのではなく、職場としてより良くなるんだ、という部分が含まれていなければならない。学校情報管理システムが導入されたことの効果はどう？

【荒島】CMIを使っていない小中学校はない(札幌で言えば)。

【武田】後継者が育たない、ということについてはどう？

【尾崎】やはりかなり難しいが、少しずつ取り組むしかない。

【武田】体系立てて取り組む必要があるのではないかな。

【荒島】北野台中の研究会は、ネットワークではなく、実際に人が

行く仕組みが新しい。その仕組みを作るのは難しい。

【武田】終着点を見据えて、そこから逆算してシステムを作っていくほうが、いいのではないかな。

【見付】突然授業に行くのではなく、常に見ていると行ってもすぐに教えられると思う。ネットワークの活用可能性はそこにあるのでは。

【武田】教員はあくまでプロなので、一般の人が入ったとしても教員がリーダーとなるべき。

【工藤】(マッシュ)

一般の人が入ってくることに対して、いろいろできる可能性は考えられるが、先生にとってどの程度必要なのか、わたしたちにはわからない。それによって提供するものも変わってくる。

【荒島】実際には学校でもきちんと整理できていない。

【尾崎】生徒に広い視野でものごとを見てもらいたい、という望みがとにかく強い。先生自信が狭いので、それを打破するために外部の人に入ってもらいたいのです。

【工藤】先生が企業に研修に出る、というのは？

【荒島】そういう制度もスタートできそうな段階にある。

【工藤】たとえば、札幌には除雪パートナーシップ制度というのがある。これは予算だけでは賄えない部分と思う。これを応用して、学校教育もパートナーシップ制度で協力体制を敷けないものか。

【荒島】学校のネットワーク環境整備に、ボランティアに頼りすぎ。環境整備はちゃんと予算化して、学校は中身を考えるようにしてほしい。

【工藤】教育だからボランティア、という考えはおかしい。必要部分はちゃんとお金を取るべき。

【武田】あと2年はお金をかけずにお願ひ、としていきたい。それまでにちゃんと形を整えて、モデル化していかなければならない。(14日)

【武田】札幌市の研修体制は？

【大橋】道研や市研などでやってるが、はっきり言ってソフトの使い方講習を無料で受けられる程度のもの。校内LANの講習などは、来年あたりから計画されている。

【武田】そういった研修のほかに、自分たちで講習をうっていく、という方法もある。その際、スケジュールをはっきりさせて、市研などと連携できる部分はするのがいい。入門より実践、事例のほうへシフトしたい。自分の教室に帰って実現できる内容を。

【見付】教職員の生協から基礎講習の話をもらっている。

【武田】そういう話があれば、ACEやNCFと合体してやるなどの方法もある。

【水越】(アトリエ・アイリス)

ACEの年間スケジュールを決めて出しておくことは必要だと思う。出張や仕事の予定もあるので。

【尾崎】基礎は基礎で重要で、底辺拡大には必要なので、それがテキストになってあるといい。

【武田】北海道教育関係人間地図をぜひ管内単位で実現したい。

【高瀬】いまあるメールアドレス一覧にはそれなりの反響がある。効果はあると思う。学校に線を入れる場合、教室で生徒に、というより、先生が使いたいからまず1本、というほうが早いし現実的かもしれない。

【尾崎】5台つなぐと5倍お金がかかる、海外のホームページを見ると国際電話料金がかかるなどという誤解もある。

(見付さんのネットワークのおはなし)

【武田】教科の中での具体的活用としてはどうだろうか。

【荒島】2003年に始まる総合学習の中に、情報が入っているが、それだけを特別のカリキュラムとして授業するわけではない。

【尾崎】ただし、情報は必修になるので、必ずどこかで受けること

にはなる。

【大橋】小学1年生でも、キーボードが打てるし、ソフトも勝手に使う。

【武田】なんでも早いうちからやればいいというものでもない。実体験することが根っこにあるはず。小学校ではそういうことが特に必要では。

【水越】意外と子供はそういうことがわかっていると思う。絵を描かせてもパソコンの表現力の限界は見極めてしまう。数ある道具のひとつ、ということは本能的にわかっているように思われる。

【武田】小学校、中学校へと段階的に理解が深まっていくことが大切。ネットワーク、マルチメディアというすべて置き換えてしまうというふうには捉える人がいるが、そうではない。

【尾崎】小学校では単に道具として使えてればいい。中学校では情報教育の大切さを教える必要がある。中学校の先生は、生徒の前でできないことが怖いので触らない、という人が多い。

【半沢】(千歳祝梅小)

図書館なら数冊でも活用すればよしとするのに、パソコンはどこかでつまずくとすべてダメ、という扱いをされることが多い。わからないときに聞きに行くということをしない生徒が多くなっている。

【武田】そのために人間関係地図が必要だ。

【半沢】小学校では、線がつながってなくてもまず道具として使っていけるような教育をしたい。

【武田】学校でパソコンを開放していないケースが多い。図書館のような管理体制で、情報司書みたいな人がいてもいいのではないかな。教科としてはやはり技術科で入っていくのがいいのだろうか？

【尾崎】情報教育には技術科に限らず、いろんな人が入ってきてほしい。

【村田】技術的なところは技術科の時間を、リテラシーについては道徳の時間を持ってきて、合わせて何時間、という授業の構成のしかた(クロスカリキュラム)がいいと思う。

【武田】大枠はできているが、それが単元レベルまで落ちてくると、まだ決まっていないというのが現実ではないでしょうか。いずれにしても、教科の中にちゃんと位置づけていく作業は必要。

【半沢】札幌教研でそういうカリキュラムを作っていないのか？

【尾崎】指導案も少ない。民間版を出していてもいいのでは。

【武田】こねっと関係の先生の資料はもらえないだろうか？

【見付】

それは出せると思う。

【尾崎】こねっとも活発で自主的な先生が多くなってきている。活性化していないところからは、引き上げてしまうことも必要なんじゃないか。

【武田】ACEの貸し出しにしてもそうだが、期限を決めて効果を検証することは必要だ。

【見付】こねっと校には寄贈ということになっているのでそうもいかない。

・まとめとして

実践事例集としてまとめていきたい。Webになっていて、紙にも刷るようなもの。それにあたって、作業グループの形成も考えていく。その際、ほかの研究会などとの連携をはかっていく。

97年度「MGT」決定！

事務局 吉田

さて、本総会において、事務局から恒例のACE北海道支部が誇

る97年もっとも頑張った先生「MGT(Most Ganbatta Teacher、モースト・ガンバッタ・ティーチャー)」を選出、謹んで発表させていただきます。

本年度のMGTに選ばれたのは、先日の発明工夫研究大会で大変ながんばりを見せた札幌市立北野台中の尾崎 廉先生です。

思えば尾崎先生と我々との衝撃の出会いとは三月の「サイバースペースSapporo」でした。長い睫毛で熱く教育を語り、深夜のコンピュータ準備室でヒコキ仲間と語り、時には謎のたこやじになって私たちを叱咤激励してくれました。

今回、副賞として来年二月のACE全国総会行きの支部補助を出させていただくことにしました。幕張で全国の先生方を向こうに回して北海道のがんばりを語ってくれると思います。

年末からこねっと校を中心とした新しい枠組みで研究会も始まります。今後も尾崎先生とともに頑張っ参りましょう！

『世界のデジタル・デザイン教育』シンポジウム

サテライト 伊藤 明彦

1997.12.12に幕張の国際会議場でJAGDA(日本グラフィックデザイナー協会)主催のシンポジウムが開催されました。『世界のデジタル・デザイン教育』の現状を報告するテーマで行われたシンポジウムは、デジタル・パブリッシング中心の展示会であるSEYBOLD97にちなんで開催されました。その中からロジャー・ブラック氏の基調講演を紹介します。

基調講演：ロジャー・ブラック氏

新聞はインフォメーション・デザインを学ぶための最もふさわしい教材である。Webも現状では、その殆どが文字の環境であり、情報のデザインとデザイナーの教育訓練を考える場合に新聞は恰好の題材といえる。世論の反応はWebの方がダイレクトで速いが、新聞の第一面は、丁度、Webの第一面と同じような役割を持つようになってきた。どちらかというとな新聞は雑誌的になってきたとも言える。情報の階層化やレイヤー化というものがストーリー的になってきている。

新聞は読者のための入り口を用意するように、リデザインされなければならないだろう。実際、世界の多くの新聞がリデザインによって読者を増やしている。例えば、キャプションに情報量を持たせて、記事を深く読まなくともテーマが理解できるように改造された新聞が購読者数を伸ばしている傾向がある。

したがって、新しい時代の新しいデザインを学ぶためには、編集とデザインの両方を学ぶ必要があるわけである。言い換えれば、これからのデザイナーは、ジャーナリストとしてもトレーニングされる必要があるということだ。また、口頭とビジュアルの両方のスキルを持った新しい役職も必要になるだろう。

これらのことをまとめると、以下のような人材が今後重要になっていくと考えられる。

- ・ Information designer：意味を追求する
- ・ Graphics reporter：情報の正確性と感性
- ・ Interface editor：理解の方法を研究する(情報のアーキテクチャのデザイン)

また、これらの役職に共通のポイントはKnowledge sharingということである。デザイナーや教師は、積極的にメディアに参加するべきである。

■世界のデザインスクールを紹介するサイトのURL

http://www.arts.ufl.edu/graphic_design/designschools.html

第 8 回高校新聞制作技術講習 会のお知らせ

札幌星園高校 高瀬敏樹
(takase@netfarm.or.jp)

第 7 回は ACE 北海道支部の全面協力のもと、1 月に北星学園女子短期大学にて行われました。今回は「PageMaker を使った新聞制作」に取り組みましたが、今回は各学校の現状に合わせて、ワープロソフト（一太郎）を使用した新聞制作をテーマに実技講習会を行います。興味のある方は是非ご参加ください。

1. 主 催：北海道高文連新聞部・北海道高校新聞教育研究会・北海道新聞社
2. 期 日：1998（平成10）年1月9日（金）
3. 会 場：北海道札幌開成高等学校
志学館会議室・コンピュータルーム
（札幌市東区北22条東21丁目 TEL011-781-8171）
4. 参加費：1名 2,000円（当日会場にてお支払い下さい）
5. 日 程： 9：00～ 受付
9：30～ 開会式
10：00～ 技術講習1（実践編）
「写植新聞はどのようにつくられるか」
12：00～ 昼休み
13：00～ 技術講習2（実習編）
「コンピュータによる新聞作り」
15：00～ 新聞制作座談会
16：50～ 閉会式
6. 申込先：〒065 札幌市東区北22条東21丁目 札幌開成高校
北海道高校新聞教育研究会事務局 渡辺 武
TEL 011-781-8171 FAX 011-781-5629

新旧会員紀行

標茶町立標茶中学校 村田 城司

標茶町立標茶中学校の村田城司です。

標茶町では今年度に入って全学校にコンピュータとLAN環境とInternetに接続するための環境が導入されました。ここ3-4カ月、私はほとんど教員としての仕事はやってません。約250台の端末のチェック、各学校のLANの整備、その他トラブルシュートなどに追われています。ちなみに授業に穴を空けたのは2-3回ですが...って、胸はって言うことかいない（^^）。とりあえず私が教員兼SEをやっているということで、細かい対応と（即訪問サービスあり）予算の節約（SEをやとうコストがゼロ）に貢献してると思います。

これでいいのかどうか、道義的な問題はおいといて...いやー、色々話せないようなことがありました。でも、標茶町って、わりと話は通じる町だと思いますよ。自由にやらせてくれたし。

標茶町について、よく「うちはなかなか理解がなくて...」と言われることがあります。で、私はいつもこう答えます。「まず自分でやってみせること。その人が便利だと思って使う姿を見せることは百の説教よりも説得力がある」

本人が幸せそうに使っていれば、他の人もきっと興味を持ちます。大体、本人が死ぬほど使い倒してないものを、他人に勧めても説得力ないでしょう。ですから、他人に押し付けたりする必要はないのです。それよりはどんどんコンピュータを使って、くだらない仕事を5分で終わらせる。それを見せることのほうが大切

だと思います。

他に標茶町について、「そこまでできるなんて、うらやましい環境ですねー」などと言われることもあります。で、私はこう答えます。「言ってる暇があったらムリヤリにやっちゃおう！悪いことならオレも混ぜてくれ」

私も色々悪いことをやりました。前日になってから「実は校長先生...」と言って断りようのない状況を作り出したり、勝手に壁に穴をあけたり、線をひっぱったり、学校の電話線を。。。したり。できれば上司の許可があった方がいいし、始末書まで書くようになっては問題ですが（苦笑）、それでもやらないよりはやった方がいい。やることが正しければ他の人は理解してくれるはずですよ。

#でも処分されてまでやることじゃないとは思いますが（わりと気弱）

最後に「村田さんはなんでコンピュータについてわりと詳しくなったの？」

それはヲタクだから... というのはおいといて。だって、自分しかなかったからしょうがなかったのです。例えば、今はMN128-SOHOをはじめとして色々なダイアルアップルーターが低価格で提供されています。が、ちょっと前までは平気で10万円以上してました。これならPC-UNIXをinstallした型遅れしまくったAT互換機をルーター替りにした方が安くて高性能。これが私のLinuxライフのスタートでした。なければ自分で何とかする、これがとっても大切だと思います。

というわけで、ゴチャゴチャ言ってるよりはやってしまった方がすっきりします。校長と怒鳴りあったりつかみ合ったりする方が後で仲良くなれる... ということは決してないですが（^^）、「それでもやるんだよ！」（by 根本 敬）という精神で、どんどん取り返しのつかないことをやりましょう。じゃなくて、皆さん、がんばりましょう。

でも「芸は身を滅ぼす」とも言いますね。こんぴゅうたあに下手に触れると苦勞ばっかりで、本業を圧倒したりして、特に若い人には勧められないような...

予告

次回からはACE News Letter上で「村田城司のネットワーク管理者日記」がスタートします。なんて、勝手に予告していいのかなー。PS.

先日、青柳さんとも話になったのですが、ACEメンバーにおける私って、実は若いんですね。青柳さんよりも年下。これには私もびっくり。で、ACEの中心メンバーは30代半ばから上の方が多いそうです。もしかして後身がいないのはマズイ？



現在職員旅行中

最近の話題から二つつ

札幌市立発寒中学校 荒島 晋
(arashima@netfarm.or.jp)

市教委通知

「インターネットに係わるプライバシー保護等の配慮について」に思う

去る12月22日に市教委より市立学校・園長宛に標記の通知がだされた。内容は、「最近のインターネットの普及により、これを利用する教職員が増加しているが、その中には私的に開設したホームページの運営にかかわって、幼児児童生徒及び保護者のプライバシー保護等の点で配慮を欠く事例が見受けられる」ということから次のような点について周知徹底するようにというものである。

1 教職員がインターネット上に私的に開設したホームページに、幼児児童生徒及び保護者に関する個人情報を掲載すること。

【例】

- (1) 幼児児童生徒及び保護者の氏名、住所、電話番号
 - (2) 幼児児童生徒の趣味や特技など
 - (3) 幼児児童生徒を特定できるような写真
 - (4) 幼児児童生徒の意見及び作品（註；これは主に絵画、作文などがあてはまるらしい）
 - (5) その他、職務上知り得た幼児児童生徒及び保護者に関する情報
- 2 教職員がインターネット上に私的に開設したホームページに、札幌市立学校・園名、担任する学級名、担当するクラブ名等を冠し、学校・園が管理運営する公的なホームページであるとの誤解を与えるような運営をすること。

【例】

- (1) 「札幌市立〇〇小学校のホームページ」
- (2) 「札幌市立〇〇小学校〇年〇組のページ」
- (3) 「札幌市立〇〇中学校〇〇部のページ」

なぜ、この年の瀬の押し迫った中で唐突とも思えるこのような通知が出されたのか、その背景を十分にくみ取る必要を感じる。インターネットに限らず昨今の高度通信情報社会の中で「情報」の重要性を十分に認識している者とそうでない者の差が歴然と現れているのではないかと。また、旧来日本人は個人情報について無頓着であるという指摘もある。児童生徒のプライバシーを守るべき立場にある学校も例外ではない。インターネットが不特定多数の者を対象にしているのに対し、生徒名簿や卒業アルバムなど手に入る者が限定されていることへの安心感からか、慣例を守りその内容の是非について問うことはあまりない。この機会に学校は児童生徒のプライバシー・個人情報・情報の所有権について再認識する必要がある。

さて、今回の通知に関してであるが、この1年間に幼稚園を含め市立学校のホームページの数は急増している。北海道の中もNCF'97-21世紀教育WGの「北海道の教育関係人間地図」ですら網羅し切れていない。確かにその中では確かに生徒の実名をつけた絵画などの作品の数が多く「児童生徒とその保護者の了解を得ているのだろうか」と危惧させるものもある。また、「うちの学校にそんなホームページあったの」という声を聞き不安を感じることもある。インターネットが着実に社会の中に浸透し、それを利

用する人口も増えているが、普段そのような環境にない学校が圧倒である。公式には「100校プロジェクト参加校」と「こねっとプラン参加校」とOCNを敷きドメインを取得している新川高校以外の学校のホームページは、一教師が個人的に契約しているプロバイダのサーバーの中にデータがあろうと任意の研究団体等がサーバーをあげている中にあるが、すべて「私的に開設した」ホームページとなる。中には教員ではなく保護者がホームページをあげているケースもある。今回の通知はまさにその点を突かれたものである。

通知の1に関しては「公的」であればよく「私的」ならだめということではなく、ともに十分に配慮すべきことである。これを欠くようなホームページは是正もしくは抹消されるべきである。

通知の2に関しては学校・園の名を冠するのであるからそれが「私的」なものであっても学校長ならびに全職員がその存在を知り、その教育目的・内容について認知することが大切である。何かトラブルがあった場合は該当教職員だけではなく最終責任は学校及び学校長になるのである。また、当然児童生徒の作品等は最終的に児童生徒にその所有権がある。したがって、児童生徒本人に掲示する旨の了解をとることと併せて未成年者であることから保護者の了解を得ることが重要であろう。ここに個人・家族のホームページではなく学校に係わるホームページの難しさがあるのではないかと。家庭・社会からの負託を受けての学校教育であるから、学校が如何に教育効果を認めたとしても、家庭の理解無くしてインターネットの教育活用は現在のところ望めないものである。インターネットに限らず学校はついこの点を忘れがちである。

今回のようにインターネットのもつ「影」の部分の指摘はつねについてまわり、このことによっていったん開設したホームページをdeleteすることになったときの精神的苦痛は大きい。現在までの経緯の中でインターネットの持つ教育効果・「光」の部分に言及されていないことはとても残念なことである。

現在、学校関係のホームページを運営しているものは再度児童生徒のプライバシーが守られているか、作品等の掲載に教育的効果が期待できるとともに関係者に了解を得ているか、秘密裡になっていないかなどをチェックするとともに、実践を示し「インターネットは本当に教育的に効果がある」胸をはって言えるようになりたいものである。そのためには相互チェックしあえるシステム・ヒューマンネットワークの構築が必要なる。

なお、現在市教委ではガイドラインを作成すべく着手の段階に入っていると聞く。これに関わらず実際にネットワークを活用し、ホームページを運営している北海道の教員の手で「本当のガイドライン」づくりを進めていきたいものである。

アプリケーション情報

インテリジェントスクール支援ソフト"イントラバケツ" (四国ラインズ)

簡単にイントラネットが構築できるソフトです。

詳しくは<http://www.jrslines.co.jp/SHIKOKULINES7.htm>をどうぞ！

天文シミュレーションソフト"星空はかせ"(アスキーサムシンググッド)

ACE-ML、ACE-NETで紹介されたソフトです。従来の天文関係のアプリに比べアイコンもわかりやすく操作も簡単です！まだ、デモ版を申し込んでいない人は急ぎましょう！！

1998 年度 ACE 北海道新年会 「新春教育談義の会」

20 世紀も残すところあとわずか。98 年新春に 21 世紀の明るい未来を見据えた教育談義を行います。未来の主役のお子様たち、ぼくたちをしっかりと支えてくれる奥様たちに感謝を込めて、是非ごいっしょにお越しください。

■日時：1998 年 1 月 17 日（土）15:00～20:00
■会場：札幌市豊平区西岡 1 条 10 丁目 15-3
電話 011-854-7032 武田亘明 宅

編集後記

いよいよ暮れも押し詰まってきました。

いろいろな方に「ずっと前からいるような気がする」というお咎めじゃなくってお誉めの言葉を戴きながらいろいろとやってきたわけですが、来年からは 2 年め、何が重要で何をやらなければいけないのか、はっきりさせていながら活動に取り組んでいきたいと思ひます。あっ、でも雪まつりもまだやってないんだよね。デジタルウィーク Sapporo もあるし。たいへんだ。（吉田）

今年は、COTF に始まり COTF で終わった一年でした。COTF の考え方の中に「プラットフォームは適材適所で」というのがあります。道具を何にするかの議論から始めるのではなく、これこれをするためにはこのマシンという考え方です。何だか特別なことではないのだけれど、この考え方のできる人が意外に少ないと思うのです。教育現場へのマルチメディア環境導入のためにも、COTF 的発想が本当に必要だと思ひます。

さて、年の瀬に LINUX の世界に足を踏み入れようと DOS-V マシンの制作に入りました。MAC にも MK-LINUX があるけれど、この際なんでもやってみよう。でも、いきなりグラフィックスボード壊れちゃいました。泣いちゃう(;;)。なんてこった・・・初期不良で交換してくれることとなりましたが、年末年始でメーカーからの入荷が遅くなりますよの SHOP の人の一言で、それはそれにしても別のボード買っちゃいました・・・う～ん。お金かかるなあ。値崩れしそうな 8600/250 も欲しいのに・・・次回は稼働報告をします。来年もよろしくお願ひします。（野口）



盛り上がった 12 月研究会。

今日はクリスマスというのに、編集会議に来てしまいました。自分でもひまじんだなあなんて思っています。ちゃんとお仕事しようと思ってきたんです。今年は・・・ん？何もしてない。いや、大阪に行ったじゃないか！くだおれで・・・あれ？いや、北野台に行ったじゃないか！夜中にじゃまされただけ・・・あれ？・・・何をしていたんだろ？という間に、一年間が終わってしまいました。何もしていないはんざわをお許し下さい・・・

ところで新発売「PowerMacintoshG3」っていうのを「まっきんとっしゅ じーさん」だとおもっているのはほくだけでしょーうか？しつれいいました！！ 半沢でした （半澤）

出張で、シンガポールとマレーシアと香港に行ってきました。香港は小学校から落第が当たり前で、日本以上に強烈な学歴社会なんです。たまたま土曜日に訪れた香港科学技術大では、講義のない学生も勉強していました。日本の学歴とは意味が違って、自発的に打ち込めない生徒は遅れをとっていく、というごく当然のことなのだと感じました。来年も目一杯頑張りましょう。（青柳）

今年の思い出はなんといっても COTF に尽きる。行ってみてわかったことは、彼らは決して奇抜なことを狙っているのではなく、教育を科学的な見地から見つめ、設計し、実践し、そして状況を把握し、次への改善に結びつけるという当然のサイ



この詰め込み工合。来年は和室を取ろう。

クルをキチンと行うことで実績を出していた、ということである。また、チームプレイという点で、見事な連携プレーを見せるその裏に、メンバー各自の日頃の地道な努力があるあたり、彼らの成功は決して幸運の産物ではなかったのである。今更ながら当然のことに気が付き、自分のやり方を見直す 1 年でもあった。（由水）

今年も、もうおわり。みなさんのお家にはサンタさんがきましたか？今年もあと少しだね。来年はきっと良い年になりますよ。きっと。きっと。もうすぐお正月。久しぶりにお餅なんか、家族と食べてみようかな。ゆっくりとさ・・・（武田）

教育とコンピュータ利用研究会 北海道支部

1997 年 12 月 25 日発行